

山村地域のツバメの生息分布

—美山町の事例—

二村 一男

はじめに

ツバメは、昔から農作物の害虫を食べてくれる益鳥と認められ、国松¹⁾による「燕（つばめ）が巣をかけると家が繁盛する」といわれるように、幸福を呼ぶ縁起の良い鳥として大事に保護されている。また、人家に巣作りをする最も身近な鳥で、スズメと同様に昔話・民話などによく登場する。俳句では春先に姿をみせる、春告げ鳥として詠まれている。

ツバメ科の鳥類は、ユーラシア、アフリカ北部、アメリカ大陸などの非常に広い範囲に分布し、約80種が知られ、日本へはショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、リュウキウツバメの5種が多くは夏鳥として渡来する。このうちツバメは、ツバメ科、ツバメ属のもので、学名を *Hirund rustica gutturalis* Scopli という。属名はツバメ、種小名は「いなかの、田園地帯の」といった意味である。

わが国では、本州、四国、九州、佐渡、隠岐、五島列島などではごく普通にみられるが、北海道では道南以外ではかなり少ない。ちなみに、著者が道東の京都大学北海道演習林標茶区で3年間行った鳥類調査²⁾では、4月から5月中旬にかけて1～2羽を5回程度観察した。これらの個体は渡りの途中であったと思われる。身近な夏鳥として親しまれているツバメが、近年過疎化の進む美山町内の山村地域では、どのように分布し、その分布域をどのように変化させているのか興味をもった。現時点での生息実態を調べておくことが必要と思い調査を行った。その調査結果について報告する。

本文をまとめるにあたって御教示いただいた京都大学農学部の渡辺弘之教授に厚くお礼申し上げます。

調査地および調査方法

美山町は京都府のほぼ中央にあり、京都市の北北東に位置し、福井県遠敷郡名田庄村、滋賀県高島郡朽木村、京都府の綾部市、京都市、和知町、日吉町、京北町に隣接する。面積340.47km²で京都府全体の面積の7.4%を占める。地勢は、東西31km、南北18kmで、東部の三国岳（959m）、北部の頭巾山（871m）、西部の長老山（961m）、南部の原峠（612m）に囲まれ、京都大学芦生演習林を源流とする由良川が東西に、さらに北から棚野川が合流して町の中央部を貫通して日本海に注いでいる。（図-1）

美山町の1995年12月1日現在の人口は5,740人である。昭和30年には10,182人であった人口が昭和55年には5,531人と約半数に減少した典型的な過疎の山村である。林業を主産業とし、美山茶、美山牛乳、しいたけ、鶏卵、山菜加工品などが町特産品として知られている。近年、美山町が地域振興・村おこしとして「美山町自然文化村」を開設し、キャンプ場、グラウンド、観光リング園、レストラン、宿泊施設などをつくった。また、数年前には日本では有数のかやぶき民家の残る北地区が国の重要伝統建造物群保存地区に指定され、昔ながらの原風景を求めてここを訪れる観光客も多くなってきている。

調査は、1991年7月10日から1995年10月7日までの間に6回行った。美山町内の安掛他42字の集落を回り、9倍の双眼鏡を使用してツバメ、コシアカツバメ、イワツバメについて生態観察をするとともに、繁殖の有無として営巣の確認も行った。

調 査 結 果

美山町内のツバメは、43字のうちわずか八原他4字の地区では確認できなかつただけで38地区に生息していた。営巣を確認できた地区は、芦生他9字の10地区であったが、ツバメは主に人家に営巣するため、地区の規模によって営巣個体の多少はあるものの、生息を確認できた全域で営巣していると思われる。コシアカツバメは、安掛他9字の10地区で生息していた。このうち中地区の知井小学校、知井会館、会社事務所、荒倉地区の生コンクリートプラント工場と内久保地区の由良川に架かる野田橋、安掛地区の農振センターでは、5～50個程度の集団繁殖（コロニー）を形成していた。また、棚地区の棚野川の棚村橋でも、5個の営巣が確認できた。これらの場所は、いずれも鉄筋コンクリート造りであった。イワツバメは、棚、川合地区の棚野川付近で10～100羽程度が観察でき、棚村橋でも2個が営巣していた。

ツバメの春の渡来日（初認）は、美山町内では、比較的温暖な大野、下平屋、北地区で3月19～27日であった。ちなみに、春の訪れの遅い芦生地区では、前地区より1カ月遅れの4月20日前後であった。

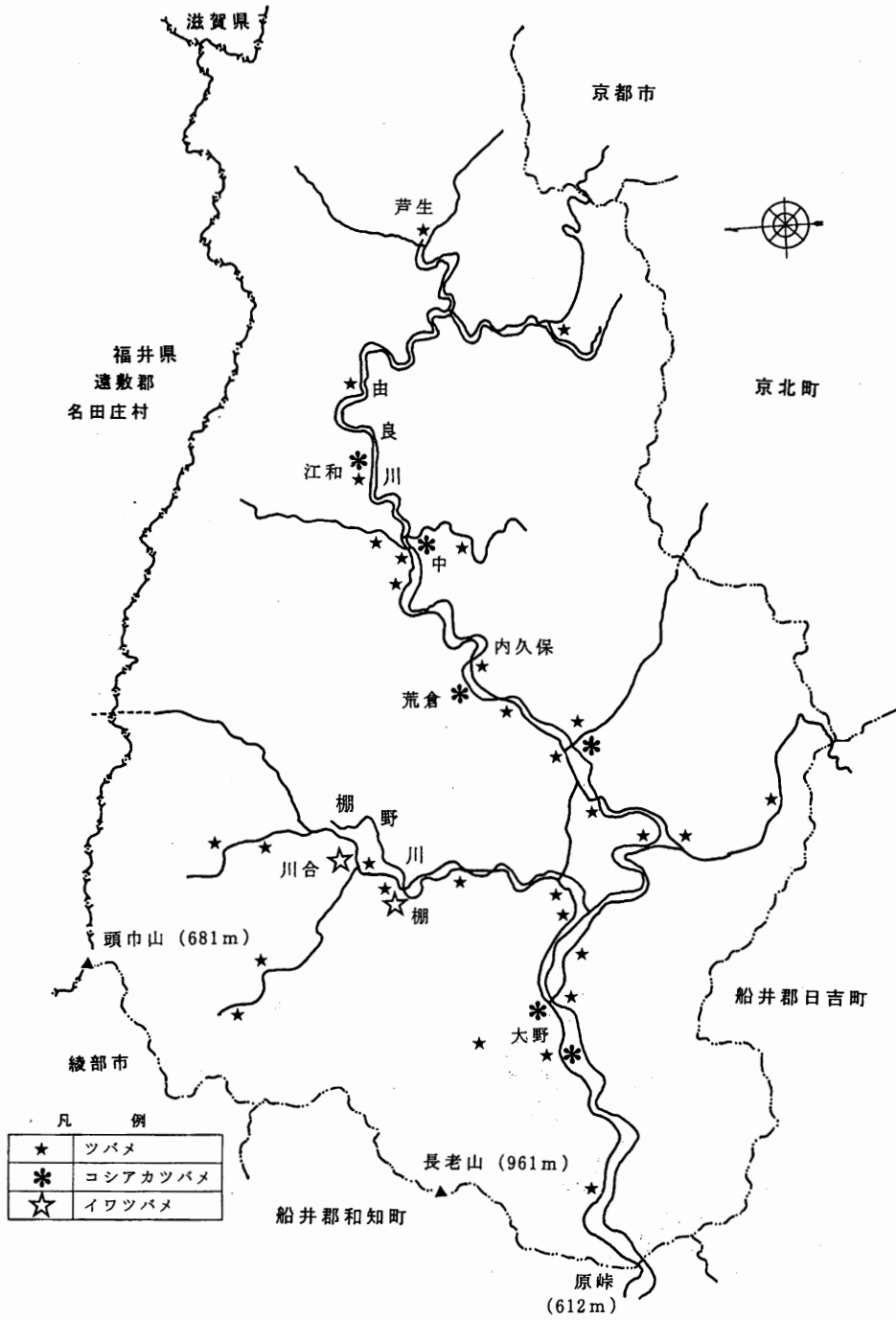
考 察

（1）季節変化

ツバメが美山町内に初渡来する地区は、由良川流域の温暖な大野地区付近に比べると、山間の芦生地区には、およそ1カ月遅く渡来する³⁾。このことはツバメの主食は空中を飛んでいる昆虫類であるが、気温が低く雪解けの遅い芦生では、これら昆虫類の発生が遅いためと思われる。7月下旬には、通常は生息個体数の少ない田歌、江和地区でも10～20羽程度の群れを観察することができた。これは巣立ちした若鳥の群れと思われる。

（2）営巣地

ツバメは、ヘビやカラス類、家ネコなどの天敵から卵、雛を守る知恵として、人の出入りの多い玄関や商店のアーケードなどによく営巣する。また、配偶関係は一夫一婦制を厳守するものが多いといわれ、仁部⁴⁾はツバメの夫婦関係は、その一方が倒れなければ、つがい関係は長く続き、前年の古巣に帰ってくる、これを「同質配偶帰還」と述べている。ところがコシアカツバメは木造の人家には巣作りをしない。美山町内においては、小学校の校舎、町役場の支所、事務所、工場の工作物、比較的大きな橋の橋桁などであり、いずれも鉄筋コンクリート造りで、集団繁殖（コロニー）の形態をとる。営巣地は由良川流域の中、大内、安掛地区に集中し、わずかに由良川の支流の棚野川（棚地区）の棚村橋に数個が営巣していた。ちなみに、隣接地の京北町の桂川でも、コンクリート橋の橋桁に10数個が営巣していた。イワツバメは棚地区の棚村橋に、コシアカツバメと同一場所に2個が営巣していた。イワツバメも普通コロニーを形成するものであるが、ここではわずか2個が営巣していただけである。しかし、川合地区で一時期100羽程度を観察したことがある。この群れはおそらく近隣の繁殖地から飛来した若鳥の一群であろう。イワツバメは、もともと山地の崖で繁殖するもので、芦生演習林の標高の高い所で、6月中旬から9月下旬にか



図一 美山町内のツバメ科の生息分布

けて、8～60羽程度が時々観察したことがある。京都府内では、日本海側に2～3カ所の繁殖地⁵⁾が確認されている。これらのことから川合地区に飛来した一群は、多分日本海側の福井県から漂行した個体と思われる。

なお調査のなかで、内久保地区の野田橋と安掛地区の農振センターにおいて、コシアカツバメの古巣にスズメが営巣していた⁶⁾。

ま と め

ツバメは美山町内のほぼ全域に生息していた。各地区での生息個体数は、およそ2～20羽程度で、戸数の多い中、安掛、大野地区に個体数も多く、戸数の少ない山間の芦生、佐々里、知見、河内谷地区では少ない傾向がみられた。コシアカツバメの生息地は、京都府内でも局地的であるといわれ、美山町内では、中、荒倉、安掛地区に集中し、コロニーの巣の規模は、5～50個程度で、いずれも由良川河畔の開けた環境に位置する鉄筋コンクリート造りの公共施設、工場、事務所であった。今後、このような施設等が、さらに建築されれば、コシアカツバメの渡来数も増加する可能性も考えられる。イワツバメは、おもに近隣の繁殖地から漂行した個体が多かったと思われる。

今後の課題として、調査回数を重ね人家種の要素のあるツバメと過疎化の進む山村地域における渡来数の推移を追跡する必要がある。

引 用 文 献

- 1) 国松俊英・谷口高司(1990)鳥のことわざ うそほんとう. 255pp, 山と溪谷社, 東京.
- 2) 二村一男(1988)北海道演習林におけるの鳥類相の季節変化について. 京大演集報. 18. 1-13.
- 3) 二村一男(1989)芦生演習林の鳥類相の季節変化. 京大演集報. 19. 1-16.
- 4) 仁部富之(1979)野の鳥の生態 1. 264pp, 大修館書店, 東京.
- 5) 京都府(1993)京都の野鳥. 176pp, 京都.
- 6) 二村一男(1996)山村地域のスズメの生息分布—美山町の事例—. 京大演集報. 29. 7-13.



[ツバメの育雛]

ツバメは、空中で飛翔中の昆虫を主食とする。
トンボを雛に与える親鳥。

泥と草の茎、わらなどを混ぜ、碗形の巣を作る。

(1969年7月20日. 芦生)